日野曳山

はじめに

古来より日野一帯は遺迹野と呼ばれ、古くは原野が広がり、この地名が日野という町名の由来とされています。そのほぼ中央に位置する馬見岡綿向神社の日野祭は、大字村井の神社とその御旅所である大字上野田の雲雀野を中心として、毎年5月2日から4日に行われる神事のことを言います。祭では神子と芝田楽を先頭に、神幣や神輿などが渡り（渡御）を行い、また16基の曳山が神社に集合し、祭に華を添えると共に盛り上げます。

日野祭で賑わう馬見岡綿向神社（寿福　滋氏　撮影）

蒲生氏と日野商人

日野祭の起源は社伝によると平安時代とされていますが、少なくとも室町時代初期までさかのぼることができます。また、日野が城下町として整備されると、日野祭の具体的な様子もわかるようになります。

蒲生氏郷銅像

中世以降の日野を述べるにあたっては、蒲生氏と日野商人を欠かすことができません。

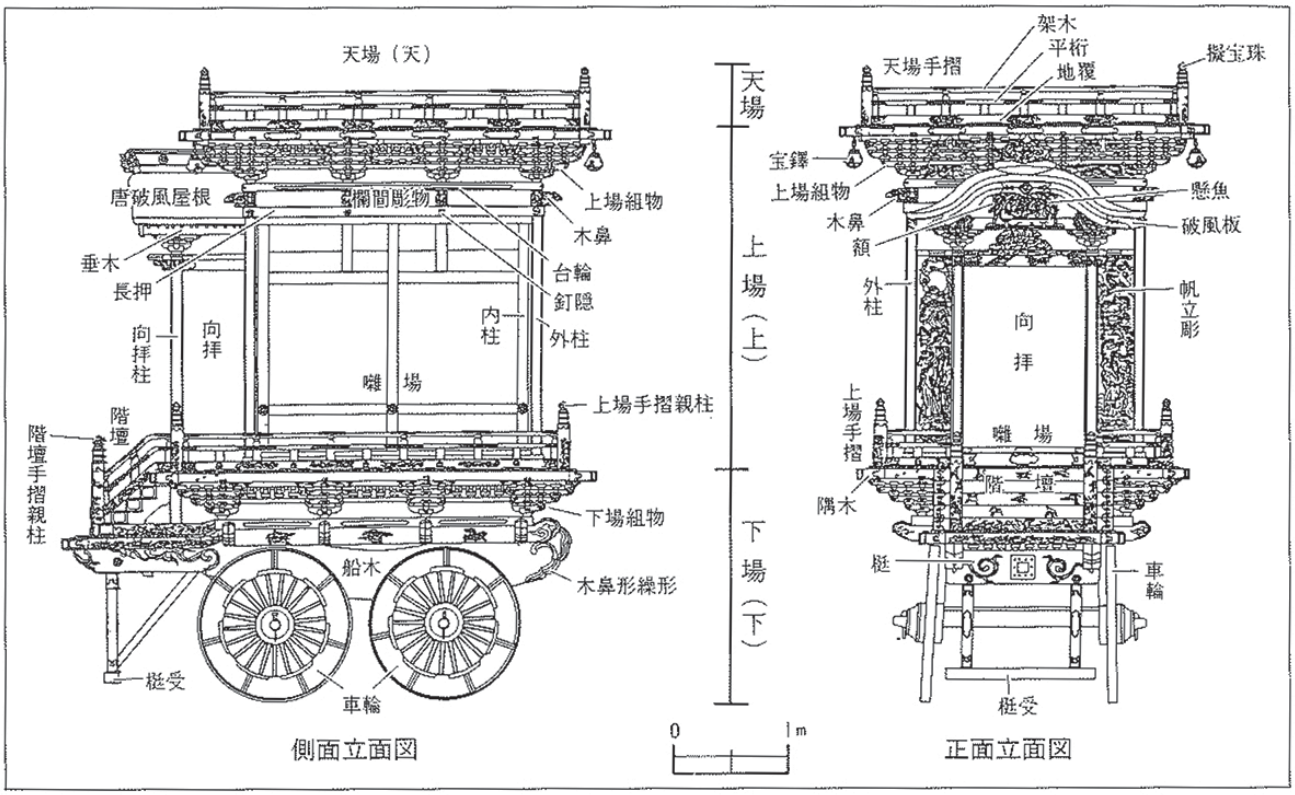
蒲生16代目の定秀は中野城を築き、城下町の整備を進めました。これが現在の日野中心街の原形となったのです。また、その孫氏郷は商業の自由化などを行い、日野発展のため大いに活躍しました。しかし、氏郷の国替えを境に町は寂れ、中野城も取り壊され、盛んであった商工業も衰えてしまいました。

このような状況の中、人々は天秤棒行商をするようになり、これが日野商人の発祥となったのです。その全盛期には、豪商と呼ばれる日野商人達も現れます。

今日の日野町があるのは、中世を通して支配した蒲生氏と、近世以降活躍した日野商人によるところが大きいと言えます。また、多くの寄進にも見られるように、彼らは綿向神社を氏神として崇拝し、日野祭に少なからずの影響を及ぼしていたはずです。

1990. 11. 1

財団法人　滋賀県文化財保護協会



日野曳山（新町）実測図（国立岐阜工業高等専門学校建築学科原図）

日野曳山の概要

現在16基ある曳山は、ほとんどが小さな町単位で所有されており、西大路・村井・大窪の３大字に分布しています。大字西大路に１基、大字村井に３基（本町・新町・越川町）、大字大窪に12基（清水町・双六町・河原田町・今井町・南大窪町・杉野神町・上鍛冶町・金英町・仕出町・岡本町・大窪町・上大窪町）があります。なお現在、越川町は村井越川町と大窪越川町に別れていますが、文献に従って大字村井に属する町として扱います。

日野曳山の基本的な構造は、階段付４輪御所車２層型式で、向拝や唐破風などの有無により多少の変化もありますが、ほぼ同一の型式と言えます。基本的に上から、天場・上場・下場に分けられます。天場はいわゆる屋上露天部で、人形などの作り物（ダシ）が据えられます。上場は囃子を演ずる所を中心とした部分です。下場は車輪や階段などがある土台となる部分です。その高さは、最大で約6.7m、平均すると5.5m前後です。なお、西大路曳山には地車と呼ばれる小さな車輪が別に付き、また、岡本町曳山の最上部は寄棟屋根となっており、他のものとやや趣が異なっています。

曳山は黒や朱の総漆塗りですが、大窪町曳山だけは素木のままです。そして、精密な細工の彫刻や金具類、あるいは豪華絢爛な幕が飾り付けられます。また、夕闇が迫る頃には、

馬見岡綿向神社の渡御絵馬（寿福　滋氏撮影）

大小多数の提灯に火が入ります。

日野曳山の起源

日野祭の歴史はかなり古いものですが、天正年間の記録をもとに描かれたという渡御絵馬からもわかるように、日野祭の発生当初から曳山があったわけではありません。

馬見岡綿向神社文書

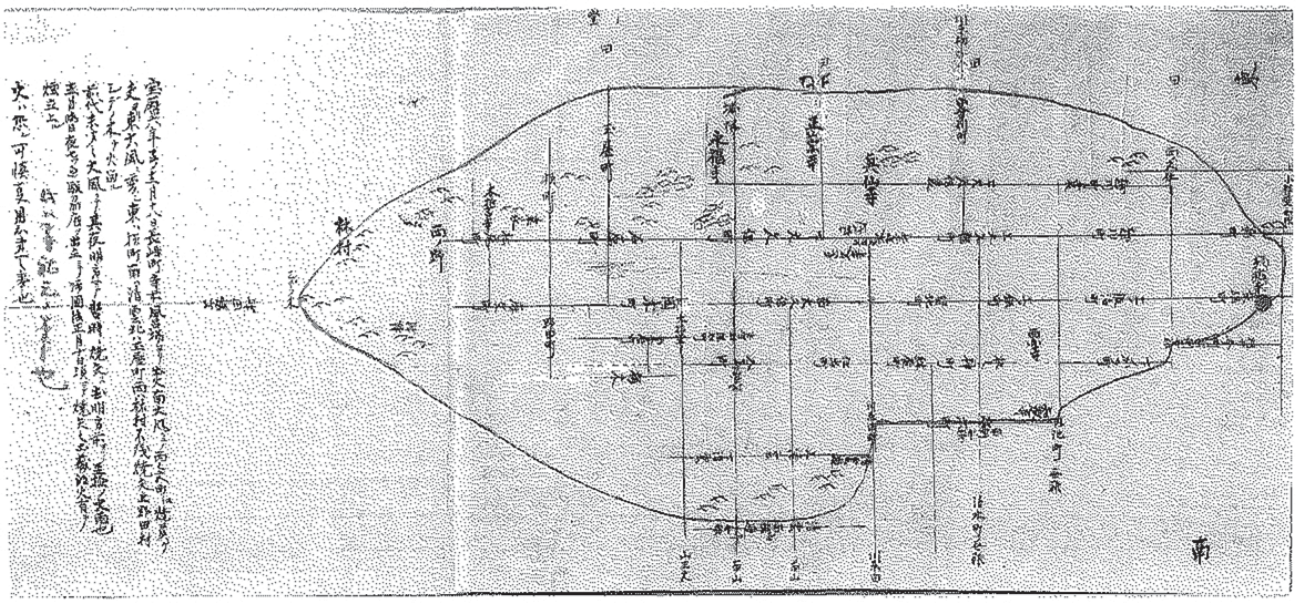
日野曳山の文献上の初見は、馬見岡綿向神社文書の延享四年(1747)です。しかし、享保19年(1734)に完成した『近江輿地志略』には、「山鉾二　其他ねりもの等繁昌也」とあります。「山鉾」とは言うまでもなく曳山の一種ですから、遅くとも享保19年には日野曳山があったということになります。さらに、文献をさかのぼってみますと、「ねりもの」と共に「笠鉾」・「母衣(ほろ)」が見られ、これらが後に変化して「山鉾」となり、さらに今でいう曳山となったものと考えられます。

このように日野曳山は、現在の完成された形で初めから日野祭に現れたものではなく、「ねりもの」の中から「笠鉾」や「母衣」が独立し、曳山の原形と言える「山鉾」が生まれてきたことがわかります。

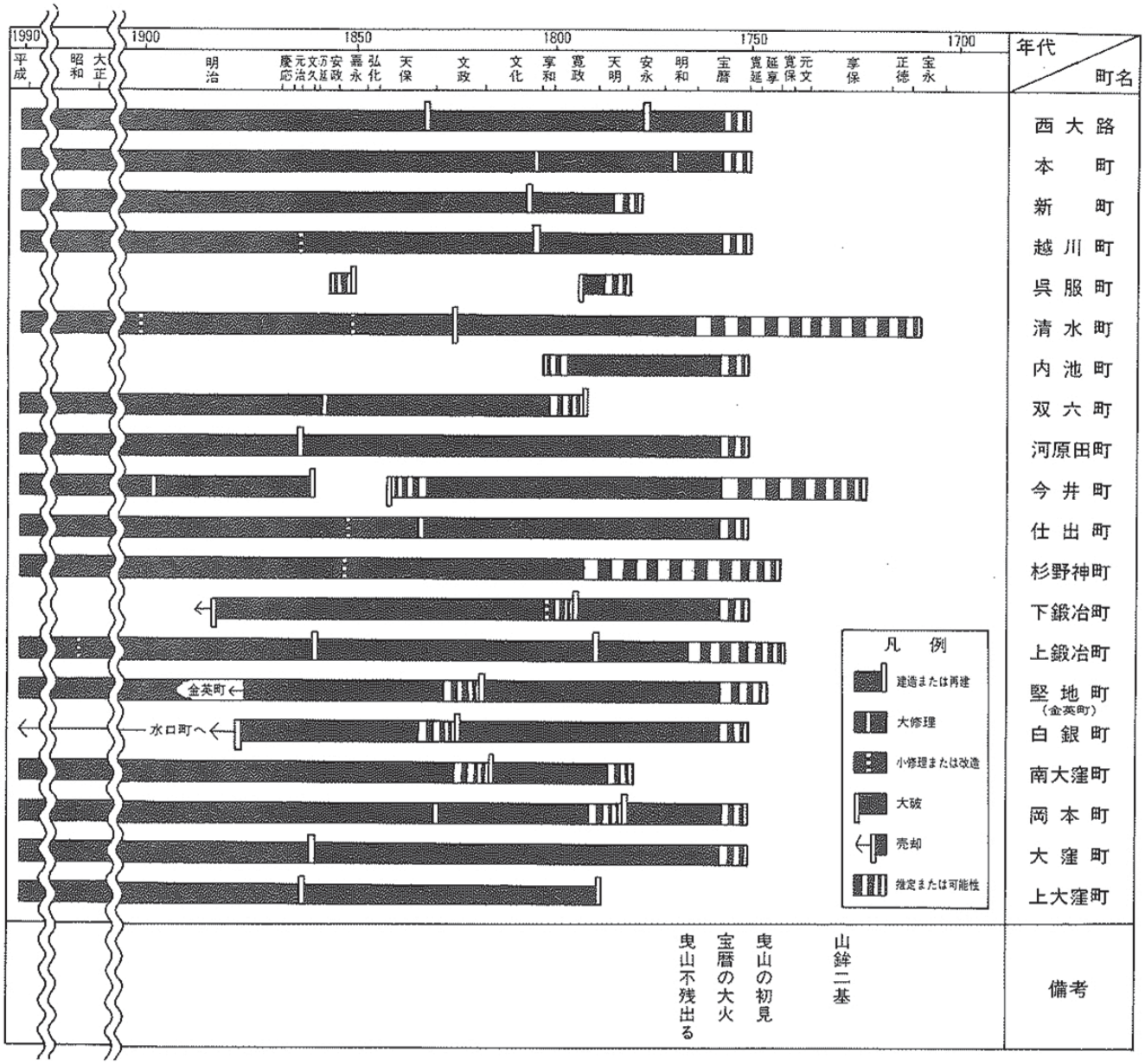
日野曳山の変遷

享保年間頃に初めて曳山が作られて以来、約250年が既に経過しています。専門家によると、その寿命は約100年と言われています。当然、当初の曳山がそのまま伝わっているとは考えられず、現在に至るまでには再建や修理など様々な変遷があったはずです。

各町内に残る文献から、そのおよその変遷を知ることができます。多くの曳山は再建や修理が繰り返され、現在の曳山は２、３代目ということがわかります。そして、それらが行われた時期は、町人文化が華やかかりし文化文政年間と、日野商人が大活躍しだした幕末に集中しています。また、現存する16基以外に、呉服・内池・白銀(しろがね)・下鍛冶の４町内にも、曳山がかつてあったこともわかりました。これらは破損したまま再建されなかったか、あるいは売却されたものと考えられます。特に、白銀町曳山は水口町へ売却され、現在も現役で活躍しています。



宝暦の日野大火絵図（山中家文書）



日野曳山推定変遷図

なお、日野曳山の変遷をみるにあたって、それを左右する重大事項があります。それは宝暦６年(1756)の日野大火と呼ばれる大火事で、曳山の大半をもつ大字大窪を含む町並みの西半分が焼け尽きてしまいました。当然、曳山も同時に焼失したと考えられます。しかし、宝暦６年と言えば曳山発生後間もない頃で、当時果たして曳山が何基あったかという問題が生じます。『宝暦祭禮行列次第及曳山』には、西大路をはじめとする曳山が記載され、少なくとも12基の曳山があったことがわかります。では、そのすべてが焼失したのでしょうか。被災地域外の５基は無事であったことは確実です。また、現在では大火の範囲内に位置する岡本町・仕出町の山倉は、当時は現在と異なる場所にあり、そこは被災地域外であったため焼失はまぬがれていたと考えられます。したがって、12基の内少なくとも７基はこの大火の被害を受けていなかったと推定されます。

日野曳山の装飾

曳山を彩る装飾として錺金具（かざりかなぐ）・彫刻・幕などがあり、その種類・量とも豊富なことが日野曳山の一つの特徴と

雁金文様の錺金具

して挙げられます。

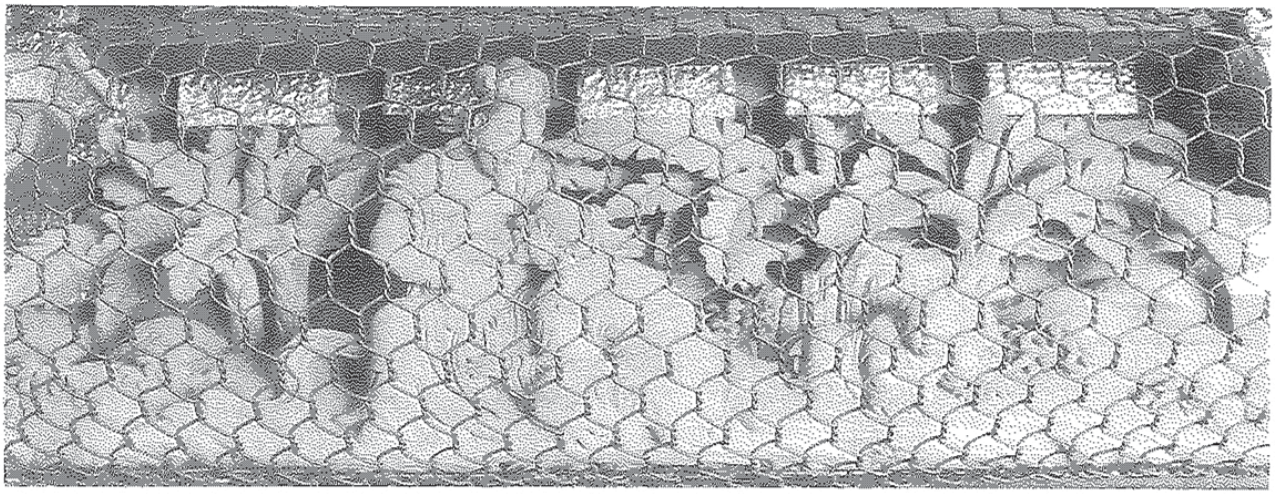
錺金具は随所に取り付けられ、線刻や透彫あるいは厚肉の鋳金で、動植物や人物が表現されています。動物には、龍・鳳凰など架空のもの、鶴・亀などの縁起もの、十二支などがあり、綿向神社の御紋である雁金も多く見られます。植物では一般的な唐草文の他、菊・松・葵などがあります。これらは複合されることが多く、その代表例が唐獅子牡丹です。人物はあまり多くありませんが、賀茂競馬や雅楽舞妓などがあります。

彫刻には素木と彩色とがあり、その題材としては、唐獅子牡丹・松に鶴・龍などの樹花鳥獣が多く、仙人などの中国説話も好んで用いられています。特に、素木彫刻には立川流として全国的にも有名な、諏訪の立川和四郎の作があります。清水町の二十四孝、岡本町の中国人物と十二支、南大窪町の中国神仙がそれです。なお、立川流彫刻は尾張半田や飛騨高山などの曳山にも多くみられます。

幕は、基本的には前幕・見送幕・左右横幕の４枚で曳山を飾ります。ただし、岡本町曳山のみは背面に後幕と大見送幕の２枚があります。幕には羅紗・緞子・繻子などの布地に、様々な文様を刺繍したものや金襴などが使われています。文様は龍が圧倒的に多く、抽象化されたり、刺繍でリアルに表現されたりしています。この他には、鳳凰・鶴・松など各種の吉祥文や、神社御紋の雁金が多く用いられています。また、特筆すべきことは、有名な画家の作品を下絵とした幕がいくつかあるということです。塩川文麟の越川町横幕、岸岱の大窪町見送幕、富岡鉄斎の金英町見送幕がそれです。また、仕出町横幕・岡本町旧大見送幕をはじめとする、中国製渡来品もあります。年代が確定できる最古のものは南大窪町の旧見送幕断片で、その収納箱には天明５年(1785)とあります。

おわりに

日野は城下町として生まれ、日野商人の活



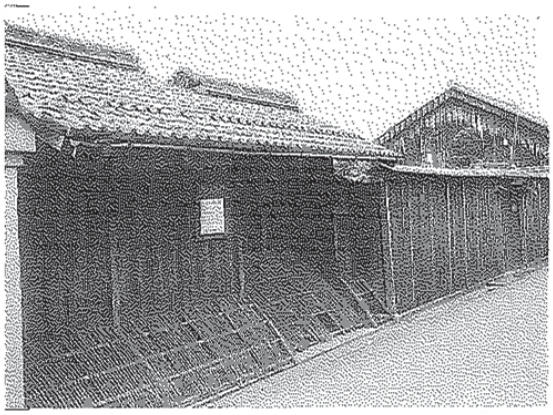
清水町曳山彫刻（水野　耕嗣氏　撮影）

清水町曳山彫刻の下絵（水野　耕嗣氏　提供）

越川町曳山横幕（寿福　滋氏　撮影）

金英町曳山横幕（寿福　滋氏　撮影）

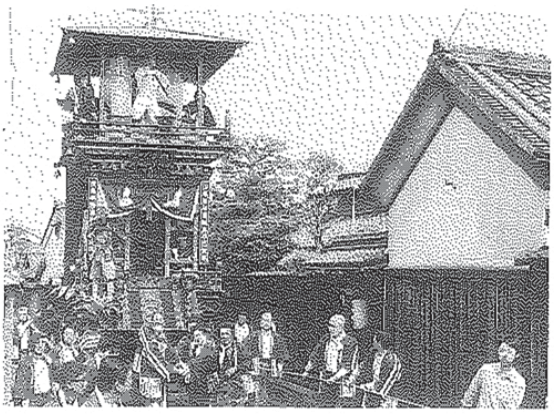
躍により発展した町です。そして、かつては日野椀や日野鉄砲といった優秀な製品の一大生産地で、塗師屋や鉄砲鍛冶・金具師など多くの職人が住んでいました。また、社寺仏閣が多いという土地柄、その建造に関わった大工もたくさんいたはずです。特に、宮中出入りの大工が多かったということから、その技術の高さを知ることができます。この優れた技術の伝統を受け継ぐ、日野在住の塗師屋・錺師・大工などの職人達が、曳山の建造や修理に数多く関わってきました。また、彫刻や



豪商中井源左衛門家

幕については、日野商人達が全国で接した当時としては最高級の文化と、持ち前の才能と努力で得た富とを、惜しげもなくつぎ込んだものが数多くみられます。もちろん、富豪と呼ばれる人達の財力だけで曳山が作られたわけではなく、一般の人々も貧しいながらも生活を切り詰め、その費用を負担するという努力がされています。すなわち、日野曳山は、日野の人々により自らのために自らの手で作られ、それに日野商人の文化と財力が加えられたものと言えましょう。その証の一つとして、日野曳山は売却されこそすれ、購入されたという事実が全くないのです。

最後に、日野曳山が出現して既に約250年がたち、金銭的な点は別として、何も問題なく曳山が現在に伝えられてきたかの如く思われがちですが、かつてその存続を左右する大事件がありました。それは明治時代末期から始められた電線の架設です。特に、曳山所有町の大半を占める大字大窪の曳山にとっては、それが障害となり、祭礼に出せない曳山の処



巡行中の岡本町曳山

分方法まで検討されたほどです。しかし、人々の努力により問題は解決され、多くの曳山が現在に伝えられています。日野曳山は曳山としての平均寿命を既に越え、最低でも建造後約120年が経過しています。事実、今すぐにでも大規模な修理をしなければ、今後の巡行に支障をきたす曳山もあります。日野町にとって貴重な文化遺産である曳山を、今後も大切に守り末永く保存していくことが、私たち現代人の責務と考えられます。

（日永伊久男氏　提供）